

中学生における遅刻の研究*

上田 敏見・伊谷 実・杉村 健**

(心理学教室) (大阪市立加美中学校) (心理学教室)

最近の中学校にみられる問題行動といえば、誰でも校内暴力を思い浮かべるであろうが、遅刻を問題行動としてあげる人はほとんどいないのではなからうか。このような一般的な風潮に加えて、生徒自身にも遅刻ぐらいはたいした問題ではないという気持がある。事実、小学校では遅刻をする者はほとんどないが、中学、高校とすすむにつれて遅刻が目立ち、大学においては教師のルーズさもあって、遅刻は日常茶飯事となっている。このことは、遅刻はルール違反であり悪いことであるという意識が、年長になるにつれて弱くなることを反映している。しかしながら、遅刻をしないということは学校生活で守らなくてはならない最低のルールであり、本研究の対象校では、“登校時刻、下校時刻を守りましょう”ということが生徒手帳に明記されている。それにもかかわらず、遅刻をする生徒が多いのである。

従来、遅刻以外の問題行動については多くの研究が行われているが、遅刻に関する心理学的研究は、10年前に発表したわれわれの研究(上田・伊谷, 1972)が唯一のものであると思われる。その研究では中学3年生を対象にし、遅刻が多い者は遅刻をしない者に比べて、知能が低く学業成績も良くないことが見いだされた。また、男子については行動および性格の記録でA評定が少なく、内田クレペリン精神作業検査で作業量が少ないことが示された。本研究では、中学生における遅刻の実態をより一層明らかにするために、同じ中学校で先の研究とは異なる3年生について、遅刻と学業成績およびE P P S性格検査との関係を調べ、1、2年生については遅刻と家庭における生活時間および学習適応性検査との関係を調べた。

遅刻と学業成績の関係

先の研究(上田・伊谷, 1972)では、学業成績として学年末における9教科をこみにした学習総評を用いたが、本研究では、教科によって違いがあるかどうかをみるために、教科ごとの成績を比較した。

方法 (a) 対象者 — 大阪市立N中学校の3年生4学級、男女63名ずつ合計126名のうち、1年間を通じて1回も遅刻をしなかった者を選び出し、遅刻なし群とした。その人数は男子12

* A Study of Junior-high School Latecomers

** Toshimi Ueda (Department of Psychology, Nara University of Education, Nara)
Minoru Itani (Kami Junior High School, Osaka)

Takeshi Sugimura (Department of Psychology, Nara University of Education, Nara)

名、女子 16 名であった。次に、これと同じ人数を遅刻回数が多い方から選び出し、遅刻あり群とした。男子の遅刻あり群（12 名）では遅刻回数が 1 年間で 16 回から 42 回まで分布し、その平均は 22.3 回であった。女子のあり群（16 名）では 5 回から 37 回まで分布し、その平均は 13.2 回であった。なお、4 学級全員についての遅刻回数の平均と標準偏差は男子 7.3 (8.8) 回、女子 4.4 (7.1) 回であり、 $t(124) = 2.02$ 、 $P < .05$ で男子の方が有意に多かった。

(b) 学業成績 — 3 学期の成績で、各教科とも 10 段階評定である。

結果と考察 表 1 は、遅刻なし群と遅刻あり群について男女別に、学業成績の平均と標準偏差（括弧内）、および両群の差とその t 検定の結果を示したものである。

表 1 学業成績

	男 子			女 子		
	なし群	あり群	差	なし群	あり群	差
国 語	6.1 (2.1)	3.5 (1.4)	2.6 **	6.1 (2.0)	5.0 (1.3)	1.1
社 会	6.4 (2.1)	3.9 (1.6)	2.5 **	5.8 (2.2)	4.7 (1.5)	1.1
数 学	6.6 (2.7)	3.4 (1.0)	3.2 **	5.3 (1.8)	5.4 (1.5)	-0.1
理 科	6.5 (2.2)	3.8 (1.2)	2.7 **	5.3 (1.9)	4.7 (1.6)	0.6
音 楽	6.1 (2.1)	3.3 (1.7)	2.8 **	6.0 (1.5)	5.1 (1.1)	0.9
美 術	5.8 (1.7)	3.2 (1.3)	2.7 **	6.3 (1.8)	5.0 (1.2)	1.3 *
保 体	6.8 (2.1)	4.9 (2.2)	1.9 *	6.2 (2.2)	4.6 (1.5)	1.7 *
技 家	6.5 (1.8)	4.6 (1.1)	1.9 **	5.7 (1.8)	4.5 (1.6)	1.2
英 語	6.5 (2.5)	3.5 (1.3)	3.0 **	5.8 (1.9)	5.1 (1.1)	0.8
全 体	6.4 (2.5)	3.6 (1.3)	2.8 **	5.8 (1.9)	4.8 (1.3)	0.9

* $P < .05$ ** $P < .01$

表から明らかのように、男子では 9 教科と全体のすべてにおいて有意差があり、遅刻なし群が遅刻あり群に比べて良い成績を示している。女子でもほとんどの教科で遅刻なし群の成績が良いが、統計的な有意差を示したのは美術と保体だけであった。したがって、女子よりも男子の場合に遅刻と学業成績の関係が強いといえる。先の研究（上田・伊谷、1972）では、遅刻の回数を 0、1～3 回、4 回以上に分けて男女の要因を入れた 3×2 の分散分析を行った。その結果、遅刻回数の主効果が有意で、4 回以上の者の成績が悪いことが示された。交互作用は有意にならなかったが、標本値でみると 4 回以上遅刻した者の成績は女子よりも男子の方が悪く、本研究と同じ結果であった。このような性差がみられた原因として、遅刻あり群における回数の平均が女子（13.2 回）よりも男子（22.3 回）で有意に多いことがあげられる。

以上のように、特に男子において遅刻と学業成績の間に強い関係が認められたが、遅刻が多いから成績が悪くなるのか、成績が悪いから遅刻が多くなるのかは明らかではない。つまり、遅刻 → 学業成績、学業成績 → 遅刻のどちらの因果関係であるかを同定することはできない。ある

生徒は前者であり、他の生徒は後者であろう。また、両者の関係は遅刻 \leftrightarrow 学業成績のように相互作用の関係であるとも考えられる。いずれにしても、登校時刻を守らせ遅刻を防止することは中学校の生徒指導において極めて重要な課題であり、そのことによって学業成績の向上が期待されるであろう。したがって、生徒指導と学習指導があい補いながら進められなくてはならないといえる。

遅刻とEPPSの関係

EPPS性格検査は現在のところ大学・一般用（肥田野ほか，1970）と高校用（肥田野ほか，1971）が市販されているが、中学校用についても標準化がすすんで出版の計画が進められている。この検査では、誰もが持っている欲求の強弱を多面的に測定できるので、遅刻なし群と遅刻あり群でどのような違いがあるかを調べてみた。

方法 (a) 対象者 —— “学業成績”の場合と同じ中学3年生で、男子は遅刻なし群と遅刻あり群12名ずつ、女子は16名ずつであった。

(b) EPPS性格検査 2学期（9月）に実施し、次の12の特性（欲求）が測定できる。

達成：むずかしい仕事（勉強）でも、最善をつくしてやりとげ、成功したいという欲求。

秩序：整理整頓を好み、定められた方法で、計画的に物事を処理したいという欲求。

自律：なんでも自分の考えで判断し、自分の思い通りにしたいという欲求。

親和：友人を求め、たがいに仲良くし、協力しあいたいという欲求。

内面認知：表面的な行動よりも、気持によって他人の感情や動機を分析し、人を判断したいという欲求。

求護：依存的で、困っているときには友人から同情され、援助を受けたいという欲求。

支配：人の上に立って指導・監督し、常にリーダーになりたいという欲求。

内罰：自信がなく、他人を責めるよりも自分のせいにしたいという欲求。

変化：毎日の生活で新しいことを求め、変ったことを経験したいという欲求。

持久：やり始めたことは、最後まで粘り強く続けたいという欲求。

異性愛：性的なことに関心をもち、異性と行動を共にしたいという欲求。

攻撃：相手を批判・攻撃し、自分の意見を強く主張したいという欲求。

結果と考察 表2は、遅刻なし群と遅刻あり群について男女別に、各特性の平均と標準偏差（括弧内）、および両群の差とその t 検定の結果を示したものである。なお、得点が高いほど欲求が強いことを示す。

男子では自律、内罰および異性愛において両群の差が有意であり、これは、遅刻なし群が遅刻あり群の者に比べて自律の欲求が強く、内罰と異性愛の欲求が弱いことを示している。言いかえれば、よく遅刻をする男子は自信が乏しく、自分の考えで判断するよりも周囲に影響されやすく、

表2 EPPS 性格検査

	男 子			女 子		
	なし群	あり群	差	なし群	あり群	差
達成	10.4 (3.7)	9.9 (2.8)	0.5	9.0 (1.5)	7.9 (1.6)	1.1
秩序	9.5 (4.4)	7.7 (3.6)	1.8	8.8 (3.2)	7.4 (3.2)	1.4
自律	14.4 (1.9)	11.5 (3.2)	2.9 **	11.8 (3.4)	11.9 (3.0)	-0.1
親和	9.0 (3.7)	9.4 (4.3)	-0.4	10.2 (3.9)	11.8 (3.9)	-1.6
内面認知	12.2 (4.3)	12.1 (3.1)	0.1	14.1 (2.7)	13.2 (2.6)	0.9
求護	10.3 (3.1)	10.9 (4.4)	-0.6	12.3 (4.0)	11.9 (4.7)	0.4
支配	7.4 (3.4)	7.3 (2.9)	0.1	6.5 (2.1)	7.7 (4.4)	-1.2
内罰	11.9 (3.1)	14.3 (3.1)	-2.4 +	13.3 (2.4)	11.8 (3.1)	1.5
変化	13.6 (3.7)	12.2 (4.5)	1.4	11.2 (3.1)	12.8 (4.3)	-1.6
持久	11.3 (3.9)	9.6 (2.8)	1.7	11.6 (4.7)	11.4 (4.1)	0.2
異性愛	10.5 (6.5)	14.3 (4.2)	-3.8 *	11.7 (5.2)	13.5 (4.7)	-1.8
攻撃	11.5 (2.9)	12.1 (3.6)	-0.6	11.6 (3.6)	10.7 (4.7)	0.9

+ $P < .10$

* $P < .05$

** $P < .01$

また、性的なことや異性への関心が強いのである。これに対して、女子ではすべての特性において両群の間に有意差がみられず、学業成績の結果と同様に、女子よりも男子の場合に遅刻と欲求との間に強い関係があるといえる。先に、このような性差の原因として遅刻回数の違いを示唆したが、男女の遅刻回数をそろえた場合にも同じような性差が生じるかどうかを検討してみる必要がある。

遅刻と生活時間の関係

親の教育的態度などを含めた家庭の状況も考慮しなくてはならないが、一般的に言うと、遅刻は寝坊と結びつき、寝坊は夜ふかしと結びつく。そこで、帰宅後の家庭における生活時間と遅刻の関係を調べるために、ここでは、土曜日と日曜日を除いた平日の家庭学習時間とテレビ視聴時間を取り上げることにした。なお、一貫して3年生を対象とする方が望ましいことはいうまでもないが、学校の都合で資料が集めにくかったために、以下では1、2年生を対象とした。

方法 (a) 対象者 — N中学校1年生2学級83名と2年生2学級81名の中から、学級と男女をこみにして、1年間を通して遅刻の回数が多い方から学年ごとに10名ずつを選び出し、遅刻あり群とした。1年生では8回以上で最高20回の者が選ばれ、その平均は12.6回であり、10名のうち女子が8名、男子が2名であった。2年生では19回以上で最高57回の者が選ばれ、その平均は32.2回であり、10名のうち男子が9名、女子が1名であった。平均回数からわかるように、

遅刻の回数は明らかに2年生の方が多。次に、遅刻だけでなく欠席も早退もない者を遅刻なし群とし、10名以上いる場合には、名列表からかたよがないように10名を選び出した。1年生では男子6名と女子4名、2年生では男子3名と女子7名であった。

(b) 生活時間——3学期(2月)に調査を実施し、平日における1日の家庭での学習時間とテレビ視聴時間を、15分単位で記入させた。

結果と考察 表3は、遅刻なし群と遅刻あり群について学年別に、家庭学習時間とテレビ視聴時間の平均と標準偏差(括弧内)、および両群の差とそのt検定の結果を示したものである。

表3 家庭における生活時間

	1 年 生			2 年 生		
	なし群	あり群	差	なし群	あり群	差
家庭学習	1°30' (30)	59' (36)	31'	1°39' (47)	57' (16)	42'*
テレビ視聴	2°54' (1°13)	4°51' (2°06)	1°57'*	2°33' (1°02)	4°33' (2°03)	2°00'*

* $P < .05$

家庭学習時間をみると、遅刻なし群の方が遅刻あり群よりも長く、統計的には2年生で有意差があった。テレビ視聴時間では逆に遅刻あり群の方が長く、1年生も2年生も有意差があった。表から明らかなように、遅刻あり群は遅刻なし群に比べて、学習時間が30~40分も少ないのに反して、テレビ視聴時間は2時間も多く、1日に4時間半から5時間もテレビを見ているのである。テレビ視聴時間が長い者は短い者に比べて学業成績が悪いことは、小学生(杉村, 1980)についても中学生(杉村・伊谷, 1980)についても確かめられており、本研究ではさらに遅刻とテレビ視聴時間との関係が明らかにされたのである。

帰宅後の中学生はさまざまな生活をしているが、その中で時間が長いものはテレビ視聴と勉強であると考えられる。そこで、表3における両者の時間を合計してみると、1年生の遅刻なし群は4時間24分、あり群は5時間50分であって、後者の方が1時間26分も長い。同様に、2年生においても4時間12分と5時間30分であって、後者の方が1時間18分も長い。もし食事時間などがほぼ同じであるとすれば遅刻あり群は遅刻なし群に比べて、睡眠時間が1時間半近くも短いことになり、これが遅刻の原因になっているのかもしれない。したがって、テレビ視聴時間を減らして睡眠時間を増やすような指導が必要であり、そのことによって遅刻が少なくなると考えられる。

遅刻と学習適応性の関係

学業成績と知能の間には有意な相関があることはよく知られた事実であるが、知能に応じた成績をあげることができない生徒も少なくない。このような場合には、生徒の学習活動に直接かかわっている諸要因が問題にされる。これを学習適応性とか学力向上要因とよんでいる。ここでは学習適応性検査(辰野, 1977)を用いて、遅刻なし群と遅刻あり群の特徴を調べることにした。

方法 (a) 対象者 — “生活時間” の場合と同じ中学 1、2 年生で、各学年とも遅刻なし群、遅刻あり群 10 名ずつであった。

(b) 学習適応性検査 — 3 学期 (2 月) に実施。15 の下位テストからなり、学習態度、学習技術、学習環境、精神・身体の健康の 4 領域にまとめられる。

学習態度

勉強の意欲：自分からやる気を出し、進んで勉強しているか。

勉強の計画：計画的に勉強しているか。

授業のうけ方：積極的に授業をうけ、それを生かすようにしているか。

学習技術

本の読み方・ノートのとり方：能率的に本を読み、ノートを活用しているか。

覚え方・考え方：じょうずな覚え方、考え方をしているか。

テストのうけ方：テストをじょうずにうけ、それを学力増進に役立たせているか。

学習環境

家庭の物的環境：家庭の物的環境を活用しているか。

家庭の心理的環境：家庭のふん囲気を勉強に役立たせているか。

学校の環境：学校の環境を積極的に活用しようとしているか。

友人関係：勉強に望ましい友人関係であるか。

精神・身体の健康

自主的態度：自分のことは積極的に自分ですか。

根気強さ：ねばり強く最後までやりとおすか。

不安傾向：不安が大きいかどうか。

神経質の徴候：神経過敏の程度はどうか。

身体的健康：身体が健康であるかどうか。

結果と考察 まず、15 の下位テストを総合した学習適応性偏差値を比較してみると、1 年生では遅刻なし群の平均と標準偏差は 54.3 (7.5)、遅刻あり群は 40.5 (4.5) となり、両群の差は $t(18) = 4.73$ 、 $P < .01$ で有意であった。2 年生では同じ順に 54.1 (9.1) と 40.1 (6.3)、 $t(18) = 3.79$ 、 $P < .01$ であった。したがって、両学年ともに遅刻なし群の方が学習適応性で望ましい状態にあるといえる。

表 4 は、下位テストの素点について、遅刻なし群と遅刻あり群の平均と標準偏差 (括弧内)、および両群の差とその t 検定の結果を示したものである。この表で得点が高いほど望ましい状態を示す。2 つの学年に共通して遅刻なし群が遅刻あり群よりも有意に高いのは、学習態度の 3 つの下位テスト、学習技術の 3 つの下位テスト、家庭の物的環境および身体的健康であり、遅刻なし群の者は望ましい学習の態度と技術を身につけ、家庭の物的環境を活用し、そして身体的に健康であるといえる。最後の身体的健康における違いは、先に述べた睡眠時間の差と関係があるかもしれない。1 年生では学校の環境、2 年生では家庭の心理的環境、友人関係、根気強さにおいて

有意差がみられ、いずれも遅刻なし群の者が望ましい状態にあることを示している。全体を通してみると、この検査でいう精神的健康よりも、直接に勉強と関係がある学習態度と学習技術に関して遅刻あり群と遅刻なし群の差が著しいといえる。なお、両群の有意差は1年生よりも2年生で多くみられ、生活時間についてもそうであった。これは、2年生の遅刻あり群は10名中9名が男子であり、しかも遅刻の平均回数が32.2回で1年生(12.6回)よりも著しく多いことによるものと考えられる。

表4 学習適応性検査

	1 年 生			2 年 生		
	なし群	あり群	差	なし群	あり群	差
学習態度						
勉強の意欲	13.3 (1.9)	9.2 (1.8)	4.1 **	13.5 (2.8)	9.0 (3.9)	4.5 *
勉強の計画	13.9 (1.4)	9.3 (2.5)	4.6 **	13.9 (2.4)	10.0 (2.0)	3.9 **
授業のうけ方	11.6 (2.0)	6.4 (2.2)	5.2 **	10.9 (2.9)	8.1 (2.9)	2.8 +
学習技術						
本の読み方	15.3 (2.1)	13.3 (2.5)	4.0 **	14.4 (2.1)	9.9 (1.5)	4.5 **
覚え方・考え方	11.8 (3.3)	6.6 (2.4)	5.2 **	12.9 (3.0)	8.3 (3.4)	4.6 **
テストのうけ方	12.7 (1.7)	7.8 (2.5)	4.9 **	11.9 (2.9)	8.4 (2.7)	3.5 *
学習環境						
家庭の物的環境	12.9 (2.4)	10.3 (1.7)	2.6 *	12.2 (1.9)	10.0 (2.2)	2.2 *
家庭の心理的環境	12.4 (1.8)	12.0 (3.3)	0.4	13.9 (2.6)	8.6 (4.0)	5.3 *
学校の環境	14.4 (2.8)	11.4 (3.4)	3.0 +	13.7 (2.6)	12.2 (4.0)	1.5
友人関係	13.8 (2.3)	13.0 (3.0)	0.8	14.3 (3.0)	11.8 (2.1)	2.9 *
精神・身体の健康						
自主的態度	13.0 (3.1)	11.5 (3.2)	1.5	13.0 (3.0)	12.4 (1.2)	0.6
根気強さ	12.3 (3.2)	11.4 (2.9)	0.9	14.3 (2.5)	11.3 (1.0)	3.0 **
不安傾向	13.0 (3.0)	13.5 (2.6)	-0.5	12.3 (3.3)	11.7 (2.5)	0.6
神経質の徴候	13.4 (2.5)	12.2 (1.6)	1.2	12.4 (4.0)	11.9 (4.1)	0.5
身体的健康	16.1 (1.5)	10.7 (3.8)	5.4 **	14.3 (2.6)	10.7 (4.6)	3.6 +

+ $P < .10$

* $P < .05$

** $P < .01$

要 約 と 結 論

中学生における遅刻の実態を明らかにするために、3年生では男女別に遅刻なし群と遅刻あり群(平均回数は男子22.3回、女子13.2回)について、学業成績とEPPS性格検査の結果を比較し、1年生と2年生では学年別に遅刻なし群と遅刻あり群(平均回数は1年12.6回、2年32.2

回) について、家庭の生活時間と学習適応性検査の結果を比較した。

- (1) 3年男子の遅刻あり群は9教科すべてにおいて、女子は美術と保体において成績が悪かった。
- (2) 3年男子の遅刻あり群はE P P Sで自律の欲求が弱く、内罰と異性愛の欲求が強かった。
- (3) 1、2年生ともに、遅刻あり群は家庭学習時間は短かく(2年のみ有意)、テレビ視聴時間が長かった。
- (4) 1、2年生ともに、遅刻あり群は学習態度、学習技術、家庭の物的環境および身体的健康が悪かった。さらに、1年生の遅刻あり群は学校の環境が悪く、2年生の遅刻あり群は家庭の心理的環境と友人関係が悪く、根気が乏しかった。

今後の課題として、遅刻の回数による違いか男女による違いかを明らかにすること、1年生から3年生にわたり同じ観点で比較すること、遅刻の回数だけでなく原因も考慮すること、遅刻が著しく多い者の事例研究を行うこと、遅刻をなくす指導方法を確立することなどがあげられる。

引 用 文 献

- 上田敏見・伊谷 実 1972 遅刻の研究(1) — 中学3年生の実態について — 奈良教育大学教育研究所紀要, 8, 75-80.
- 杉村 健 1980 小学生におけるテレビ視聴時間の分析 奈良教育大学教育研究所紀要, 16, 83-92.
- 杉村 健・伊谷 実 1980 中学生における学習適応性の研究(1) 日本教育心理学会第22回総会発表論文集.
- 肥田野・岩原・岩脇・杉村・福原 1970 E P P S性格検査(大学・一般用) 日本文化科学社.
- 肥田野・岩原・岩脇・杉村・福原 1970 E P P S性格検査(高校用) 日本文化科学社.
- 辰野千寿 1977 新学習適応性検査(A A I) 日本図書文化協会.

<付記> 本研究は日本教育心理学会第20回(1978)、第21回(1979)、および第24回(1982)総会において発表したものをまとめたものである。